

---

# オンライン

知夢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オンライン

### 【Nコード】

N7330Q

### 【作者名】

知夢

### 【あらすじ】

高城海斗は退屈な毎日を送っていた。

しかしそんな海斗にもネクストハンターというオンラインゲームをする趣味があった。

そしてそのことで学年一の頭脳を持つ本城勇樹と仲良くなる。

だがある時、二人はネクストハンターの世界に引きずり込まれてしまう。

二人は無事に元の世界に戻ることができるのか！？



## オンライン

「オンライン」

プロログ

この世には都市伝説や噂などといったものが多数存在する。こういった類のものは時と場合に関係なくおこる現象である。そう、私たちの知らないところで・・・

その日、青年はいつもと変わらない日々を過ごしていた。朝、起きて学校に行き、授業を受けて帰る、という毎日が青年は退屈でたまらなかった。

そんな青年―海斗にも一つだけ楽しみがある。それは「ネクストハンター」というオンラインゲームである。このゲームはネクストワールドという世界が舞台になっていて、プレイヤーは自分の分身となるアバターを操作して巨大なモンスターやロボットを倒して自分を強くしていくというゲームであるのだが、このゲームに海斗は熱中していたのだった。

そして今日も「ネクストハンター」をやるために家に帰ろうと、げた箱で靴をはき学校から出ようとしていた。

その時、「ちょっといいかな?」と後ろから声をかけられ海斗はその場で立ち止まった。声的に男子であろうと思いながら海斗はその声の方向に振り向く。

この時から悪夢の日々が始まるなど思いもしなかっただろう・・・

## 第一章 出会い

声の方向に振り向いた時、海斗は驚いた。なんとそこにいたのは学年のテストでいつもトップの本城勇樹だったのだ。本城と海斗は全く関わりなどない、さらに話したことさえないのだ。なのになぜこいつが俺に話しかけているのか、そんな事を海斗が考えていると本城のほうから話しかけてきた。

「君、高城海斗君？」

本城が海斗を見つめながら聞いてきた。

「そうだけど、なに？」

「海斗君はこれ知ってる？」

そういつて、本城が俺に見せたのは何やら赤い封筒のようなものだった。

「俺は知らないけど、それがどうしたの？」

「君、持っていないの？」

すぐに本城が聞いてきた。

「ああ、持っていないよ。だけどなんで俺に？」

「海斗君、ネクハンやってるでしょ？」ネクハンとはネクストハンターの略である。

「やってるけどなんで知ってんの？」

「君の友達の水口君から聞いたから。」

「水口の奴、勝手に人の個人情報喋りやがって……。まあいいや、で、俺がネクハンやってることと君の持ってる封筒とどんな関係があるの？」

海斗が愚痴をこぼしながらも聞く。

「実はこの封筒、nextから届いたものなんだ。昨日ネクハンやってたらいきなり家に届いてさ、まだ開けてないから中身はわからないけど。君なら持ってると思ってね。」

その時海斗は本城がネクハンをやっている封筒をもらっていることを疑った。しかし本城の目からはそのようなものは感じられなかった。

海斗はその気持ちを紛らわすため・・・

「あいにく、俺は持っていない。」

そう答えた。そしてその言葉の後しばらく二人は黙りこんでいた。しかしその沈黙を破ったのはやはり本城のほうだった。

「そうか、残念だな。まあもし届いたら僕にも言ってくれよ」「分かった」

「それじゃあ」

そう言い残し本城はその場から去っていった。そして海斗も家に帰るため学校を後にしたのだった。

## 封筒

### 第二章 封筒

外は12月ということもあってもう暗くなっていた。そんな中、海斗は帰りの坂道を登っていた。海斗は考えていた。あの封筒はなんなのか、そしてなぜあいつだけが持っているのか、それが気になってしょうがなかった。そんな自分に明日見せてもらえばいいだろうと言い聞かせて、ダッシュで家へと帰るのだった。

家に帰るころにはもう6時を回っていた。海斗は急いで二階に上がると自分の部屋に入り、

ネクストハンターを起動した。海斗のレベルは99だがまだやり残したことはたくさんある。さらに明日から新しいイベントも始まるので今日はその下準備をするつもりだ。今回イベントの内容は知らされていない、そこに海斗はひかれた。

そうして準備をしているうちにかなりの時間が経過していた。海斗はもうそろそろ寝ようと思いいゲームを終了しようとした。

その時一通の電子メールが届いた。海斗は不思議に思いメールを開く。メールには、

「あなたに渡したいものがあります。受け取りますか？」

そう書かれていて、その下には「はい」・「いいえ」と書かれたアイコンが表示されていた。

毎日の生活に退屈していた海斗は興味本意で「はい」というアイコンを押してしまった。

すると・・・

「ありがとうございます。すぐお届けします。」

と表示され、次の瞬間「ガタンッ」と何かが落ちるような音がした。その時、海斗は本城が

「ネクハンやってたらいきなり家に封筒が届いた」

と言っていたことを思い出した。海斗はおそろおそろ部屋の扉を開

けた。

そこには1枚の赤い封筒が落ちていた。海斗はあまりにも怖くて開けられずに、そのまま布団の中にもぐりこみ、その出来事を忘れるかのように寝たのだった。

次の日、海斗はいつもより早く学校に到着した。家にいると何かに飲み込まれてしまうような気がしたからだ。当然人の気配などはなく海斗はまっすぐ教室へと向かった。

「ああ、なんで俺こんなに早く来てんだろ？」

そんな愚痴をこぼしながら、海斗は教室の扉を開けた。すると誰かが机に座っているのが見えた。間違いないあいつは本城である。なんでこんな早く来てるのか、そんな事を考えながら海斗は自然と本城のところに歩み寄っていた。話すことは一つだけ、赤い封筒の事である。

本城の前まで来ると本城はこっちを見てきた。二人の間に妙な緊張感が漂う。その空気を振り払うかのように海斗は話しかけた。

「あのさ・・・」

「なに？」

「この封筒届いたんだけど」

考えるより先に言葉が出ていた。

「マジっ？」

本城が身を乗り出して聞いていた。

「ああ、お前と同じようにネクハンやってたらいきなり届いてさ・・・」

「そうか・・・」

本城はしばらく考えてから俺に向って・・・

「じゃあ今から開けてみるかっ！」

そういつてかばんの中から赤い封筒を取り出した。いきなり何言っ  
てんだよという気持ちと同時に、本当にまだ開けてないんだなと海  
斗は驚いた。そして本城と海斗は机に二つの封筒を並べた。そして・  
・

「じゃあ開けるぞ」



海斗も本城もドキドキしていた。今から何がでてくるのか、どうなるのか・・・

「せーの」の掛け声で二人は一斉に封筒を開けるのだった。

### 第三章 謎の数字

封筒の中身には一枚の紙が入っていた。

「なんだろう？」

海斗が言う。

本城の方はじっとその紙を眺めていた。そして何が書かれているのか読み始めた。

「招待状。あなた方は選ばれた人間ですので特別に特別なイベントに招待します、だってさ。」

「ほんとにそれだけか？」

海斗は聞いた。

「いや、まだなんか入ってる。えっと今度は番号が書いてある。」  
『番号？』

海斗は不思議に思い聞いた。

そこには数字で「221885205」と書かれていた。

「なんだろう？この数字」

海斗は自分の頭がこんがらがっていくような気がした。

しばらく二人はその数字を見つめていた。おそらく二人ともこの数字は何なのか考えているのだろう。しかし結局二人とも答えを出せずに、ついに「わかんないから気にすんのやめよう」と本城が言う。てそれに海斗も納得してその話はそこで終わった。

その日も普段通りの学校生活を過ごし、帰ろうかと思ったがどうもそんな気にはなれず、海斗は一人、放課後の教室に残っていた。海斗にはまだあの数字が気になっているのだろう。

「本当、何なんだよあの数字・・・」

海斗は自分の頭をフルに回転させて考えた、しかし本城が分からないものが海斗に分かるはずもなく、ついに海斗は考えるのをやめた。

「もう帰るかっ」

そう言っただけを聞き上げようとした時、廊下から誰かの足音が聞こえてきた。その足音は確実にこちらに向かってきている。学校に一人でいればだれもが怖くなるであろう。そしてその足音が徐々に近づいてくるにつれて、海斗の緊張感も高まっていった。そしてついに人の影が扉に写りその影が扉を開けた。

入ってきた人物を見た時、海斗は体から力が抜けた。なんと扉を開けて入ってきたのは、本城だったのだ。

「なんだ、お前か」

緊張感が抜けて思わず本音が出る。

「何だって何だよ。てか海斗は何してんの？」

なぜか本城は俺の事を海斗と読んでいた。まあ悪い気はしないのだが。海斗は自分がなぜここににいるのかすべて本城に話した。すると本城が意外にも、

「実は僕もなんだ・・・」

そう言い返した来た。

「お前も同じかよ。やっぱ気になるよな」

「でさ、あの数字の事なんだけど、やっぱゲーム内に関係してると思うんだよね」

さすがは学年トップだと海斗は思った。そんなこと自分では思いつかないであろうと・・・

「で、それでどうすんの？」

海斗が聞くとすぐに本城が、

「今からやるに決まってるだろ！」

きっぱりとそう言い張った。

「やるって・・・ネクハン？」

「そうだよ。」即答だ。

「分かったよ。でもどこで？」

「じゃあ・・・家来いよ」

その言葉を聞いた時、海斗は少し興味がわき、すんなりとオーケー

してしまった。

「じゃあ行こうか」

本城が海斗を呼んでいる。

「今行くっ！」

そう言って海斗はかばんを持ち勢いよく教室を飛び出したのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7330q/>

---

オンライン

2011年10月8日18時05分発行